

荒川聖天様芭蕉句碑の碑修記

「川とこの川下や月の友」



補助
壽樂院真龍
武蔵野連中
田邊雲龍
川田梅林
川田文桂
川田泉里
持田其通
持田荒淵
持田修太



この碑の解説にあたり、花園町教育委員会はもとより青木・田尻・町田・吉橋各先生方、他大勢の皆様のご協力により、成就いたしました。心から感謝申し上げます。平成十七年二月寿樂院住職記す。

これは、深川にある芭蕉記念館の庭に建立されている同句の石碑です。

芭蕉句碑裏面の拓本

荒川盤 秩父山より出て 隅田川の上流多り 岸の个者し支古と屏風越
立流可如く 流れの急奈る事 矢乎放てるに等し 志可呼来連るも うへ奈る扁し
水清ら可丹 望ミうち飛ら个、れハ むさし野の月の詠め 此川を古楚巨擘とも
い者満本し个連 折として 舟を泛遍 蕉翁の深川尔て乃 月の一句に
感ずる事阿りとて 郷人誰可連 志 平同うし 曾可句碑を荒澤山に建ぬ 境内の花
汀の子規、川原の衛 ち、ふ嶺の白妙なるも共に景色越添る尔似多里 可つ鮎鯉能
戸田の下与り上里、て愛天る、ハその可ミ公能献 里もの那りしよ里 今猶人のよく
知る處也 され盤 川上川下の水魚の友垣と四時をり、に可飛し 彼高尚の一路乎
多とらハ 素と可鮎鯉乃淵瀬乎於可して 爰尔名を那し あら川水のこ奈れ、
末春ミただ可ハと呼る、如き人々もいて古須や者と 此度此碑ハ 成連ると南舞

慶応三丁卯歳秋八月

東都

行庵洒雄識



補助
壽樂院真龍
武蔵野連中
田邊雲龍
川田梅林
川田文桂
川田泉里
持田其道
持田荒淵
持田修太

隅田川と中川を結ぶ運河、小名木川のほぼ中間（江東区猿江町あたり）に老木の五本松があった。この景勝地に舟をさして、元禄五・六年頃名月を賞するにつけ、ああ、この川上には、今ごろ同じ心で月を仰ぐ風雅の友がいるのだなあ、蕉翁吟ず。

現代語訳

荒川は秩父の山から出て、隅田川の上流である。岸の峻しいことは、屏風を立てたようであり、流れの急なことは、矢を射たようである。このように荒川を呼んできたのももつともなことだ。水は清らかで、あたりが広々と開けているから武蔵野の月の眺望は素晴らしい。この荒川をこそ天下一の川と呼んで欲しいものだ。

時には舟を浮かべて、芭蕉翁が深川で月を吟じた月の一句に共感することがあると言って、此の地の人々が心をひとつにして、その句碑を荒澤山に建てた。境内の花や、水際に遊ぶホトトギス、川原の千鳥、白く輝く秩父の嶺もみな、荒川の景色によくつりあっている。一方で、鮎や鯉が戸田の下流からはる遡上してきて、人々に珍重されるということは、その昔、お上への献上品だったから、今に至るまで、人々によく知られているところである。そのようなことから、荒川の上流下流の人たちが、水魚の交わりのように仲良く、四季折々に行き来して、俳句（俳諧・発句）の道をきわめて行けば、もともと荒川が、鮎鯉の棲む淵や瀬を流れ下るうちに、立派な川となり、荒川の水がこなれこなれて、末は澄んだ川（隅田川）となるように、この川のように、と呼ばれる人が出てこないことがあるうか、きつと出てくるに違いない、と信じて此の度この碑を建てたのである。

慶応三丁卯歳秋八月

東都

行庵洒雄識



芭蕉句碑表面の拓本



高野山真言宗 寿樂院 平成十七年二月十一日記

掖山養紀拜書



芭蕉句碑表面（平成十七年二月九日撮影）

10月26日（月曜日）

☆ふるさとの情報をあなたに…
池をめぐって 夜もすがら
俳人・松尾芭蕉また、自らの秋の感動を十七文字の中に数多く詠み込んだ。番組では、県内百景以上残る芭蕉句碑のうち、秋を詠んだものをいくつか訪ね、そこに詠まれた秋の風物やふるさとの情の中で…

秋：芭蕉句碑を訪ねて
▽ふるさとに拾う
午後0・15 名月や
句に託してきた。

テレ玉 まよりの 景観探訪組

秋草、虫の声、名月、昔から人々はこうし秋の風情を愛し、その思いを歌や句に託してきた。

川上とこの川下や月の友
～花園町聖天院の芭蕉句碑

昭和六十二年十月二十六日、埼玉新聞のテレビ番組案内に掲載された芭蕉句碑の記事です。